＜社会科＞

よりよい社会の実現を目指す子が育つ社会科学習

～社会的事象を「自分ごと」として捉え，社会とのつながりが実感できる指導・援助を通して～

大垣市立牧田小学校　教諭　髙田　直希

【概要】
本研究実践は，子ども達が社会的事象に対する見方・考え方を身に付け「よりよい社会の実現を目指す子」が育つための指導や援助の在り方を追究した実践の記録である。岐阜県の社会科では，「よりよい社会の実現を目指す子」の育成が大切にされている。これは，「よりよい社会の在り方について考え，自らの生き方につなげていく子」を意味する。子ども達には，社会科を通して，実生活とのつながりを感じ，自らが「よりよく生きる」ためにどうすればよいか考えることができるようになってほしいと願っている。今年度は，４年生から６年生の３学年にわたり社会科を担当している。担当した全ての学年で「社会とのつながり」を大切にして授業実践を行ってきた。この実践では，「自分ごととして捉える教材や単元構想」「社会との関わりを考える学習活動」「社会とのつながりを実感する振り返り」を軸にし，指導・援助を行ってきた。実践を通して，子ども達一人一人の学びが深まり，「自らの生き方につなげていく子」を育てることができた。

１　主題設定の理由

（1）学習指導要領の視点から

小学校学習指導要領の社会科の目標では，「社会的な見方・考え方を働かせ，課題を追究したり解決したりする活動を通して，グローバル化する国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の形成者に必要な公民としての資質・能力の基礎を育成することを目指す。」となっている。これから先，子ども達には急速な時代の変化や身の回りにある社会の諸問題に対して，適切に対応し，よりよい社会の実現を目指して主体的に向き合おうとすることや社会への関わり方を選択・判断する力を培っていくことが求められている。このような力を培うためには，社会的事象を自分のこととして捉えて学習し，社会とのつながりを実感する指導を行うことが必要であると考えた。そして，実生活とのつながりから，自らが「よりよく生きる」ためにどうすればよいか考えることができるようになってほしいという願いのもと本主題を設定した。

（２）児童の実態から

本年度担当した，４年生から６年生までの児童に対して本研究に関わって４月に社会科の学習に対するアンケート調査を行った。「社会科は好きであるか。」では，「好き」と回答した児童は，４年生５７％，５年生４２％，６年生３０％であった。「社会科と自分の生活とのつながりを感じるか。」では，「つながりを感じる」と回答した児童は，４年生２８％，５年生６４％，６年生３０％だった。また，「地域や社会をよくするために何をすべきか考えることがあるか」では，「ある」と回答した児童は，４年生２８％，５年生５７％，６年生１５％だった。これらの結果から，社会科に対して苦手意識がある児童が多いことや，社会とのつながりを実感して，自分の生活や社会に生かそうとする児童が少ないことが分かる。社会科で学んだことを生活に結びつけていくことは，学習指導要領にある「公民としての資質・能力を育てる」ことであるが，社会科と実生活を結びつけ，「自らの生き方につなげていく力」に課題が見られた。このアンケート調査の結果からも社会的事象について「自分ごと」として捉えて，社会とのつながりを実感する子を育てていくことの必要性を強く感じた。以上のことから，研究主題を「よりよい社会の実現を目指す子が育つ社会科学習」とした。

２　研究仮説

社会的事象を「自分ごと」として捉えることができる教材開発や単元構想を行い，社会への関わりを考えることのできる学習活動を工夫して，学習したことを社会生活に生かそうとする振り返りの指導を行えば，子ども達が社会とのつながりを実感し，「よりよい社会の在り方について考え，自らの生き方につなげていく子」を育てることができる。

３　研究内容

以上の研究仮説を実証するために，研究内容を次の通りとした。

【研究内容Ⅰ】「自分ごと」として捉える教材や単元構成の工夫

（1）子どもが「自分ごと」として主体的に考えることのできる地域教材の開発

（2）意識の連続性を大切にした単元構成の工夫

【研究内容Ⅱ】社会との関わりを考える学習活動の工夫

（1）社会への関わり方を選択・判断する授業

【研究内容Ⅲ】社会とのつながりを実感する指導・援助の工夫

（1）自分の変容や高まりを実感する振り返りの指導・援助

（2）社会に関わろうとする姿の価値付け

４　研究実践

【研究内容Ⅰ】「自分ごと」として捉える教材や単元構成の工夫

（1）子どもが「自分ごと」として主体的に考えることのできる地域教材の開発

子どもが社会とのつながりを実感するためには，各単元で取り扱う教材を子ども自身が自分との関わりの中で考えていくことが大切である。社会的事象を「自分ごと」として捉えるために「自分の住んでいる牧田地域と自分とのつながりを考える教材」を開発すれば，より子ども達が主体的に学習をし，子どもが「社会とのつながりを実感する」ことができると考え，様々な地域教材の開発を行った。教材開発する際には，学習指導要領の指導内容から，単元のねらいに迫ることができるのかを吟味した。そして，具体的な指導計画を立てた。

今年度,「自分ごと」として捉え主体的に学習できるように教材化したのは主に以下の通りである。

	取り扱う社会的事象	単元名	「自分ごと」として捉える地域素材・人材の活用
①	社会に見られる課題を通して、そこへの関わり方を考えることができるもの。	水はどこから（4年） ごみのゆくえ（4年）	・牧田の浄水場で働く方やクリーンセンターの方をGTで招き、社会に見られる課題へ主体的に学ぼうとする必然性を生む。
②	人の生き方に感動やあこがれを生み出すことのできるもの。	米づくりのさかんな地域（5年）	・米作り農家Tさんの指導のもと、田植え体験・収穫を行い、熱意をもって米作りに取り組む方の思いを考える。
③	既習内容や子どもの生活経験に関連するもの。	江戸幕府と政治の安定（6年）	・関ケ原古戦場記念館に出向き、施設の方の話から、歴史的事象と住んでいる牧田地域とのつながりを実感する。

【図表１　「自分ごと」として捉える地域教材の開発】

第６学年「江戸幕府と政治の安定」の実践

６年生「江戸幕府と政治の安定」を具体例に取り上げる。６年生の社会科は，多くが歴史分野であり，社会とのつながりを感じることが難しい。歴史的事象をより「自分ごと」として捉え主体的に学び続けることができるように単元に入る前の活動を工夫した。実際に，関ケ原町にある「岐阜関ケ原古戦場記念館」に見学に行き，当時の戦いの様子を映像で見たり，聞いたりしながら体感した。また，施設の方と，事前に入念な打ち合わせを行い，牧田地区とのつながりの面から関ケ原の戦いについて講義していただき，この戦いが「２６０年以上続く江戸幕府の始まり」のきっかけとなったことを捉えられるようにした。

「見学活動の実際」（T：施設の方，C：児童）

T:みんなは，関ケ原の戦いは知っていますか？

C:東軍の徳川家康が勝った戦いです。

C:全国的にも有名なんだよね。

T:この戦いが，後の江戸幕府の成立につながり長い平和な世の中が続いていったんだよ。

C：へえー。

T：なんと２６０年以上も江戸時代は続くんだよ。

C：えー！とても長い！！令和ってまだ４年だよ。

T:ここは歴史的にすごい場所なんだけれど，この戦いはみんなの牧田小学校の近くでも繰り広げられたんだよ。

T：烏頭坂って知っているよね。（床面の地図を指し示しながら）

C：A さんが住んでいる所だ！A さんの家に行くまでに旗がいっぱい立っているね！

T：烏頭坂は，「島津の退き口」が有名で西軍の島津もそこで激しく戦ったんだ。

T：「島津の退き口」は知っているかな。

C：敵中突破ですね！さっきグラウンドビジョンで見たものですね。

T:そうです。島津の家来には長寿院盛淳という人もいて，その方のお墓も牧田支所の近くにある琳光寺にあるんだよ。

C:学校のすぐ近くだね。確かに旗がたくさん立っている！僕の家からその旗見えます！

T:みんなが住んでいる牧田地区は歴史的にとてもすごい場所なんだよ。また，学校の授業でも江戸時代について学びましょう。

C：今までこんなにすごい所と思わなかったな。

見学を終えて，これからの学習に対しての感想を書いた。次の文は，A 児の感想である。

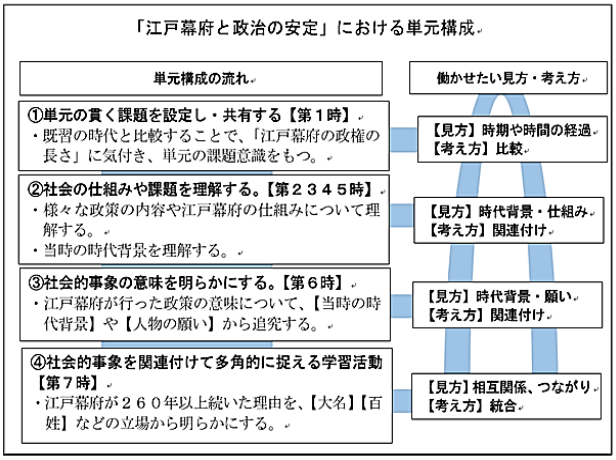
【地域とのつながりを実感した児童の感想】

A 児：映像を見たり，火縄銃や槍などの武器に実際に触れたりしてよく学べました。豊臣秀吉の死後，西軍も東軍もゆずれない戦いだったと思います。これからの学習では，江戸幕府がどのような時代になっていくのか。家康が亡くなってから，**だれが江戸幕府の中心となり２６０年以上のも江戸幕府が続いていったのか知りたいです。そして，江戸幕府のきっかけとなった自分たちの住んでいる場所のすごさを知りたいです。**

下線の文章は，社会的事象を「自分ごと」として捉え自ら主体的に学ぼうとする表れである。自分の住んでいる地域とのつながりを実感することで児童が「学びたい」「知りたい」という思いをもつことができた。地域教材を開発することにより歴史的事象とのつながりを感じることができた。

（２）意識の連続性を大切した単元構成の工夫

子どもが社会とつながる授業とは，社会的事象を「自分ごと」して捉え，見方・考え方を働かせながら，その意味を多角的に追究する授業である。６年生「江戸幕府の政治と安定」では，A 児の感想をもとにして単元の構成を考えていった。



【図表２　意識の連続性を大切にした単元構成】

本単元の導入では，上記の児童 A が書いた下線の感想を全体に取り上げた。そして，これまで学習した時代の政権の長さと比較することで，江戸時代の政権の長さを捉えられるようにした。単元を通して子どもの意識が連続するように「なぜ，２６０年以上も江戸幕府が続いたのだろう」という単元を貫く課題を設定した。その上で図表２に示してあるように単元の学習をデザインしていった。単元を①～④の構成に分けて，単元の中で子どもたちが問題を解決するために必要となる見方・考え方を明確にした。また，追究の視点や方法を単元に構成の中に各時間で位置付けた。単元の終末の活動では，単元を貫く課題に立ちかえることで，既習の学習内容をもとに多角的に追究し，「江戸幕府が２６０年以上続いた理由」について明確にする場を設定した。終末の活動では，６年生の学級全員が，「大名」「百姓」などの立場から，単元を貫く課題に対しての考えを表現できた。子どもの意識の連続性を大切にし，単元構成の工夫をして，単元で獲得する知識を明確にした単元構成を行ったことで，社会的事象を「自分ごと」として捉え主体的に追究していく意欲を高め続けることができた。

【研究内容Ⅱ】社会との関わりを考える学習活動の工夫

（１）社会への関わり方を選択・判断する授業

子どもが社会とのつながりを実感し，よりよい社会の実現を目指していくには，「社会的事象の見方・考え方」を働かせながら，自分ができることを考え，社会への関わり方を選択・判断することが，とても大切である。社会的事象を「自分ごと」として捉え，社会への関わり方を選択・判断する場を意図的に学習活動に位置付けることで「自分自身が社会とどのように関わればよいか」を考えることのできる児童を育ててきた。選択・判断する授業では，社会に見られる課題に対し，「自分の関わりを考える」「実際に行われているいくつかの働きの中から選択する」「これからのよりよい社会の在り方を考え提案する」活動が考えられる。今年度行った，社会への関わり方を選択・判断するための主な学習活動の具体例は以下の通りである。

方法	具体例
社会に見られる課題に対し、自分の関わりを考える。	「水はどこから」（４学年） かぎりある水を使い続けるために自分たちにできることは何か。 「ごみのしょりと利用」（４学年） ごみをへらすために自分にできることは何か。 「自然災害からくらしを守る」（４学年） 地震から身を守るために自分たちに何ができるのか。
社会に見られる課題に対し、実際に行われているいくつかの働きの中から選択する。	「これからの食料生産とわたしたち」（５学年） 日本の食料生産の課題に対して、これからどのように食料生産を進めていったらよいか。 「これからの工業生産とわたしたち」（５学年） これからの日本の工業生産に大切なことは何か。
社会に見られる課題に対し、これからのよりよい社会の在り方を考え、提案する。	「子育て支援の願いを実現する政治」（６学年） 地域の人々にとってよい公園にしていくために、どのような公園をつくればよいか。

【図表３　社会への関わり方を選択・判断する授業の具体】

第４学年「水はどこから」の実践

「水はどこから」の学習では，牧田浄水場の管理人であるＹさんをゲストティーチャーに招いて学習をした。Ｙさんは，安全でおいしい水を牧田地区の方に届けるために，雨の日も，雪の日も台風の日でも毎日牧田浄水場に行って水の点検をしている方である。そんなＹさんの思いを感じながら，「私たちが，生活に欠かせない水は，どこでどのようにきれいにされ送られてくるのだろうか」という単元を貫く課題を設定し学習を進めた。そして，単元の最後の時間に，これまでの学習のまとめとして，「限りある水を大切にしていくために，私たちには何ができるだろう」という選択・判断の授業を位置付けた。

「授業の実際」（Ｔ：教師，Ｃ：児童）

Ｔ:これまでの学習で，「私たちが，生活に欠かせない水は，どこでどのようにきれいにされ送られてくるのだろうか」を学習してきましたね。

Ｔ:だれが，安全でおいしい水をみんなの所へ届けていたのでしょう。

Ｃ：牧田浄水場のＹさんです。

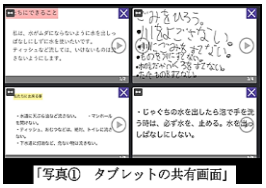
Ｔ：そうですね。さらに，Ｙさんはこんなことをお話して下さいました。

【資料　牧田浄水場管理人Ｙさんの言葉を提示】
みんなに安全で，おいしい水を届けるため，毎日頑張っています。そのために，雨の日も，雪の日もお正月でも，日曜日でも毎日点検しています。水道からひねればすぐに水がでてくると思います。でも，水には限りがあります。みんなも水の使い方は考えて下さいね。

Ｔ:この話を覚えていますか？水には限りがあるのですね。

Ｃ：水は大切に使わないといけないんだね。

Ｔ:今日は，限りある水のために自分たちにできることを考えていきましょう。


「写真①　タブレットの共有画面」

写真①は，子ども達の考えをタブレットの共有画面に提示した一部のものである。画面を全体公開にすることで，多様な考えを全員で共有することができる。考えを可視化することでそれぞれの意見を比較し，よりよく関わる方法を考えられるようにした。

子ども達は，「歯磨きをするときには水を止めてコップに入れる。」「天ぷら油やティッシュなど流してはいけないものを流さない。」「手を洗うときに水を勢いよく出しすぎない。」など，自分たちにできることを選択・判断していった。このように子ども達は，牧田浄水場の管理人であるＹさんの思いを再確認し，自分たちにできることを考えていった。「限りある水」と「自分とのつながり」を意識しながら学習を進めることができた。単元を通して獲得した知識をもとに，自分にできることを日常生活の経験と関わらせながら考えることができた。さらに交流を通して，まず自分で考え仲間と意見交流をすることでお互いの考えを深め合い，よりよい行動に気付くことができた。

「話し合い活動の様子」

Ｃ:私は，水を出しっぱなしにしないようにしたいです。理由は，使わない水がもったいないからです。

Ｃ:僕も家で歯磨きをするとき，水を出しっぱなしにしてしまいます。コップに水をためれば節水ができると思います。

Ｃ:僕も学校で，手を洗うとき勢いよく水を出していました。もったいないから石けんを使うときは水を止めようと思います。

Ｃ：水を汚さないことも大切だと思います。家で，少しだけど油を流していたな。流していけない物は絶対にこれからはしてはいけないと思います。

どの学年においても「自分自身が社会とどのように関わればよいか」という選択・判断する学習活動を単元の中で設定してきた。この活動を位置付けることで，社会的事象に対して自分がどのように関わっていくのか「自覚」することができた。社会との関わりを考える選択・判断する学習活動を位置付けることで，社会科の授業と実生活を結びつけることにつながった。そして「社会とつながり」に気付く児童を育てることができた。

【研究内容Ⅲ】社会とのつながりを実感する指導・援助の工夫

（１）自分の変容や高まりを実感する振り返りの指導・援助

社会とのつながり実感し，社会と関わろうとする子ども達を育てていくためには，自己の変容や高まりを実感する振り返りを位置付ける。子ども達の学びが深まり，自らの生き方につなげていくことができるように，ここでは学習の振り返りを書く際に，視点を図表４のように提示した。

「振り返りの視点」

①自分の成長を振り返る。

「はじめは、～だったけれど・・・」

「〇〇の学習を通して・・・・・・」

②地域の方（講師）の話から学んだことや、仲間との話し合いを通して、学んだこと。

「〇〇さんの話を聞いて・・・」

「〇〇さんの考えをきいて・・」

③これからの学習につなげたいこと。

「これからは・・」

「これからは家でも・・」

「この次の学習では・・」

【図表４　振り返りの視点】

学年や学習内容により，振り返りの記述内容は異なるがこの図表４の視点は，どの学年においても指導した。「よりよく生きる」方法を考えるためには，学びを終えたことを，日常生活につなげていかなければならない。この「振り返り活動」は、全学年で重点的に指導した。ここでは，５年生「米づくりの盛んな地域」を具体例に取り上げる。

第５学年「米づくりの盛んな地域」の実践

「米づくりの盛んな地域」の実践では，全国での生産量が高い庄内平野を題材にした。しかし，米農家の米作りの工夫や努力をより実感して身近に捉えるために，牧田の米作り農家 T さんの協力のもと学習を展開した。単元を導入で農家の方の指導のもと苗植えをさせていただき，その経験から，「米作りに関わる人々はどのような工夫や努力をして，よりよい米を生産しているのだろう。」という単元を貫く課題の達成に向けて学習した。次の児童の記述は，単元の学習の中での振り返りの変容である。

「米づくり盛んな地域の振り返り」

第１時「苗植え体験を終えて」

B 児：手作業と機械に乗せてもらい苗を植えました。T さんに教わりながら手で苗を植えたけれど真っ直ぐ植えることは難しかったです。楽しかったけれど，手作業で田植えをするのは大変でした。

第５時「米作りの工夫」

B 児：みんなで話し合って米作りは，田に水を入れたり抜いたりして，水の深さを調節することが大切だと分かりました。庄内平野では，米作りの生産性を高めるために地域の農家の方が協力していました。T さんの話でも水の管理が大事と言っていたので共通していると思いました。

単元の終末

「振り返りの視点を活用した子どもの振り返り」

B 児：はじめは，米づくりについて，田植え体験やバケツ稲で育てて大変だなと思っていただけだったけれど，米づくりの盛んな地域の学習をして米づくりに関わる人々の工夫や努力についてよく分かりました。（視点①）田植えや稲刈りの体験で T さんに教えてもらったり，友達と話し合ったりして農家の方が１年間の中でどのように米を作っているのかということや，水の管理の大切さなどの工夫や努力を知りました。（視点②）T さんは，「食べる人がおいしいといってもらえるように」と願って米作りをしていました。私は，これまでご飯つぶを残すことがあったけれど，これからは，お米を育てた方の気持ちを考えて，最後の一つぶまでお米を食べたいです。もっとお米のひみつについてこれからの生活で調べていきたいです。（視点③）

図表４，振り返りの視点を活用することで児童が，第１時「田植え体験」や第５時「水の管理の大切さ」など，既習の学習内容を関わらせながら，振り返りをし，「自己の変容や高まりを実感」することができた。特に③の記述については，「社会とのつながりを実感」し，「自己の生き方につなげていく」ために大切に指導をしてきた。B 児は，「自分ごと」として，この単元の学習を受け止め，主体的にこれから自分がどのようにしてきたいのか考えることができた。

（２）社会に関わろうとする姿の価値付け

「社会とのつながりを実感」し，「自己の生き方につなげて」いくために，実際に単元の学習を終えて，生活の中で実践している姿を紹介し価値付けた。写真②は，４年生「地震からくらしを守る」の学習後に，タブレットを家庭に持ち帰り，家庭の防災グッズについて調べたことを発表する児童の様子である。この単元では地震に備えての家庭や学校，市などの取り組みについて学習した。そして，「自分たちにできること」を考え，生活の中で生かすように指導した。C 児は学習したことと生活を関わらせながら主体的に「よりよく生きる方法」を考え実行することができた。

【写真②　家庭で調べたことを発表する C 児】

発表後，すぐに C 児の授業後の行動の見届けと価値付けを行い，学級全体に，その「行動の価値」を広げるようにした。

「行動の価値付け」と「方向付け」

T: 実際に，家で調べてきてすごいね。

C:授業前は，防災グッズが家にあることを知らなかったです。授業で学習してから，防災対策をしなきゃと思って家にも防災グッズがあるのかお母さんに聞いてみました。

T:調べてどうだった？

C：家に防災グッズがあることを初めて知ってびっくりした。授業で学習した物があるのか，お母さんと一緒に確認しました！

T:学習後に，自分で防災対策をしなくてはいけないと感じて，自分で調べようとしたことが素晴らしいです。(←行動の価値付け)

T:みんなも〇〇さんのように，自分にできることを考えて行動してみましょう。(←方向付け)

このように授業後の行動をすぐに価値付け，全体への方向付けをしたことによって，社会科と実生活がつながっていることをたくさんの子ども達が実感できるようになった。また，社会的事象を「自分ごと」として捉え，自らがどのように社会に関わっていくか考えるきっかけとなった。

５　成果と課題

【研究内容Ⅰ】

〇「自分の住んでいる地域と自分とのつながり」を意識しながら学ぶことで，「自分ごと」として捉えることができ，主体的に学ぶ子どもが増えた。

〇子どもの意識の連続性を大切にして単元を貫く課題を子ども達と共につくり，単元構成をすること，終末の活動を位置付けることで「自分ごと」として捉えられるようになり主体的に学び続けることができた。

【研究内容Ⅱ】

〇単元の終末の時間に選択・判断の授業を位置付けることで社会的事象に対しての関わり方を「自分ごと」として考えることができた。

▲自分が社会とどのように関わっていくのか，さらに話し合いを焦点化して方向性を決めていく。

【研究内容Ⅲ】

〇振り返りの視点を活用して自分の変容を表現したり，社会に関わっている姿を価値付けたりすることで自らが「よりよく生きる」方法を考えることができるようになった。

▲授業後，実際に「自分がしていること」を再度交流することで，さらに自分の生活に生かそうとする気持ちを高めることができるようにする。

６　研究を終えて

図表５は，４月に実施したアンケート調査を１２月に再度行った結果である。

	第４学年		第５学年		第６学年	
	４月	１２月	４月	１２月	４月	１２月
1.社会科が好きである。	５７%	７８%	４２%	１００%	３０%	７６%
2.自分との生活につながりを感じる。	２８%	１００%	６４%	１００%	３０%	６９%
3.地域社会をよりよくするために自分にすべきことを考える。	２８%	８５%	５７%	８５%	１５%	８４%

今回の実践を通して，児童一人一人が社会的事象を「自分ごと」として捉えて主体的に学び続けながら学習を深め，「社会とのつながりを実感する」ことができるようになった。それが，４月から１２月の変容にも表れている。「自分ごととして捉える教材や単元構想」「社会との関わりを考える学習活動」「社会とのつながりを実感する振り返り」を意図的に仕組んできたことによって子ども達が「よりよく生きる」方法を考えられるようになった。また，「よりよい社会の実現を目指す子」の育成につながった。今後も単元の学習内容を洗い出し，単元での実践に広げていく。さらに実践を積み重ね，「社会科と自分の生活とのつながり」を感じ，自らが「よりよく生きる」ためにどうすればよいか考える子どもたちを育てるための指導・援助について研鑽を続けていく。

７　参考文献や資料

〇文部科学省「小学校学習指導要領解説　社会科編」平成２９年７月

〇岐阜県小学校社会科研究部会「岐阜大会記念刊行物　社会科の基礎・基本」　令和元年10月

〇岐阜県小学校社会科研究部会「社会科教育　第８８号」　令和４年３月